

かささぎ通信 第66号

2018年 3月 9日 発行

どなたでもいつの会でも参加できます

森三郎刈谷市民の会

「森三郎の作品を読む会」

二〇一八年二月の「森三郎の作品を読む会」では、
『森三郎童話選集かささぎ物語』所収の
「夕顔物語」「馬方八五郎」「父」を読みました

「夕顔物語」(初出『赤い鳥』昭和11年8月号)は、「かささぎ通信」第56号で紹介しましたが、集まった会員にとつてまだ記憶に新しい作品でした。昭和11年8月号には鈴木三重吉逝去の報が載っています。昭和9年までは『赤い鳥』誌上に毎号2〜4作品載っていた三郎作品が、この頃激減していました。編集者としての役割で多忙になっていたのかと想像してしました。

掲載年月	作品
昭和10年	3
1月号	
2月号	1
4月号	1
5月号	1
6月号	1
8月号	1
9月号	1
12月号	1
昭和11年	1
1月号	
8月号	3
10月号	9
(追悼号)	

しかし、一九五八(昭和33)年十二月号の『新文明』(新文明社)「貸間探し 鈴木三重吉研究(二)」の中で森三郎自身次のように語っていました。

私は毎号『赤い鳥』に、本名やら変名やらで童話を書かせて貰つてゐたのであつたが、その中に童話が書けなくなつた。書けなくなつたといふよりは、どうしても小説でなければと思ひこむやうになつたからであつた。「澤山書いたんだから少し休め」と先生が言はれるので、私はいい気になつて遊んでゐて、相変らず先生から叱られたり、可愛がられたりしてゐた。(四八頁)

この話は昔話の「天人女房」難題型の話で、難題の内容は古事記の世界を描いたような複雑なものです。童話の世界から一步踏み出したという思いが伝わってきました。

「馬方八五郎」(初出『赤い鳥』昭和8年4月号)は「かささぎ通信」第29号で紹介しましたが、三郎さんの家から近い「熊村」「椎の木屋敷」にヒントを得た地名が出てきます。話の筋からするとそれは刈谷のことではないのですが、三郎さんの創作の方法が見えてきます。これと同様な手法の作品に「銀作」(初出『赤い鳥』昭和8年5月号)があります。「銀作」も作品中の「和泉屋」という木綿問屋の名前は、三郎さんの家の近くにあつた店の屋号から採つたのではないかと思われまふ。先日「森三郎刈谷市民の会」の会員総会・交流会があり、その席で「森三郎の作品を読む会」メンバーの金子和代さんが「銀作」の舞台を刈谷に見立てて、文学散歩する発表をしてくれましたが、好評でした。森三郎作品と作品中の地名・屋号などとの関連をまとめた鈴木哲氏の「森三郎刈谷文学散歩」が、森三郎の作品を読む会誌『かささぎ』第3号(二〇一七年十二月)に載っています。(注)

「父」の初出は『雪こんこんお寺の柿の木』(昭和十八年、泰光社)です。「赤い鳥」終刊後、昭和十七年から十八年にかけて出版された四冊目の単行本に収められています。構想がしっかりしていて、小説を書きたかつたという思いが分かる作品です。「父」というタイトルと、子どもへの父の思いを表す内容とがよくかみ合っている作品だという感想が出席者から出ました。

(注)『かささぎ』第3号には他に、「森三郎童話の原典・話材を探る」「赤い鳥」森三郎初期童話の出典、「私は垣間見た、童話の内その残酷性を―三郎・白秋・南吉―」や、西村清さんの思い出をまとめられた「古書店的精神」、「父」・「銀作」の感想文、さらに「森三郎さんと刈谷の昔話」「森三郎童話の朗読刈谷第一号」「森三郎刈谷市民の会」「森三郎と兄妹たち」などの随筆が載っています。

次回「森三郎の作品を読む会」(第二金曜日に刈谷市中央図書館で開催)

平成30年4月13日(金)午後1時半〜3時半

「お染」「わらび餅」「めぐりあい」(森三郎童話選集かささぎ物語)